

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

鴨目原遺跡

長野・平郡地区営農飲食用水施設整備事業（農村総合整備モデル事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1989・3

宮崎県・西都市教育委員会

序

本報告書は、市耕地課の長野・平郡地区営農飲雜用水施設整備事業（農村総合整備モデル事業）に伴い実施した発掘調査結果の報告であります。

調査の結果、縄文時代早期の住居跡や集石遺構等に加え、寺関係の遺構・遺物が検出されました。中でも、縄文時代早期の住居跡は県内においても極めて珍らしく、また、集石遺構についても、本遺跡のように集石の下から出土がたいせきして検出された例は県内でも初めてであり、これら貴重な資料を得ることができました。

これらの成果をまとめた本書が、地域の歴史研究や社会教育・学校教育の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解と認識が得られれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方がた、並びに地元の方がたに衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成元年3月31日

西都市教育委員会

教育長 篠原利信

例 言

- 本書は、長野・平郡地区営農飲雜用水施設整備事業に伴ない、昭和 63 年度に実施した鶴原遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、西都市教育委員会が実施した。調査関係者は次のとおりである。

耕地課 課長 杉田正孝

補佐 久島英晴

係長 泊宗利

担当 原田伸一

教育委員会 教育長 篠原利信

社会教育課長 伊藤政実

同文化財係長 黒川忠男

調査員 西都原古墳研究所

所長 日高正晴

嘱託 緒方吉信

主事 緒方政幾

遺物整理協力 整理員 関谷恵子

- 本書に使用した図の作成・執筆・編集は蓑方が行った。
- 本書末尾のまとめは、日高が行った。
- 本書の遺物実測は、蓑方が行った。
- 出土遺物の整理は、関谷恵子があたった。
- 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

本文目次

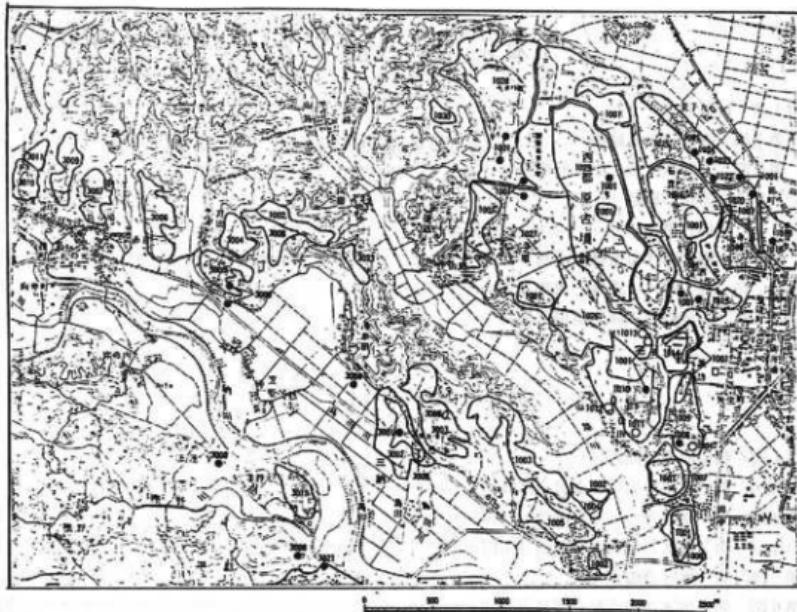
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	1
第3節 調査の概要	2
第2章 造構と遺物	7
第1節 縄文時代の造構と遺物	7
第2節 弥生時代の造構と遺物	9
第3節 古墳時代以降の造構と遺物	10

挿図目次

第1図 鴨目原遺跡位置図	
第2図 鴨目原遺跡発掘調査調査区域図	
第3図 第1地区 A～C 地点造構分布図	2
第4図 第2地区 F～H 地点造構分布図	4
第5図 第3地区造構分布図	5
第6図 第1地区A地点配石造構実測図	12
第7図 第1地区C地点東側壁面土層図	12
第8図 第1地区C地点溝状配石造構実測図	13
第9図 第2地区 1号～4号集石造構実測図	14
第10図 第3地区中央部土層図	15
第11図 第3地区住居址実測図	16
第12図 第3地区ピット及び集石造構実測図	17
第13図 第3地区 2号・3号溝状造構実測図	18
第14図 出土土器実測図・拓影（縄文土器）	19
第15図 出土土器実測図（弥生土器・土師器等）	20
第16図 出土土器実測図（布痕土器・陶器等）	21
第17図 出土土器実測図（瓦器・石器等）	22

図版目次

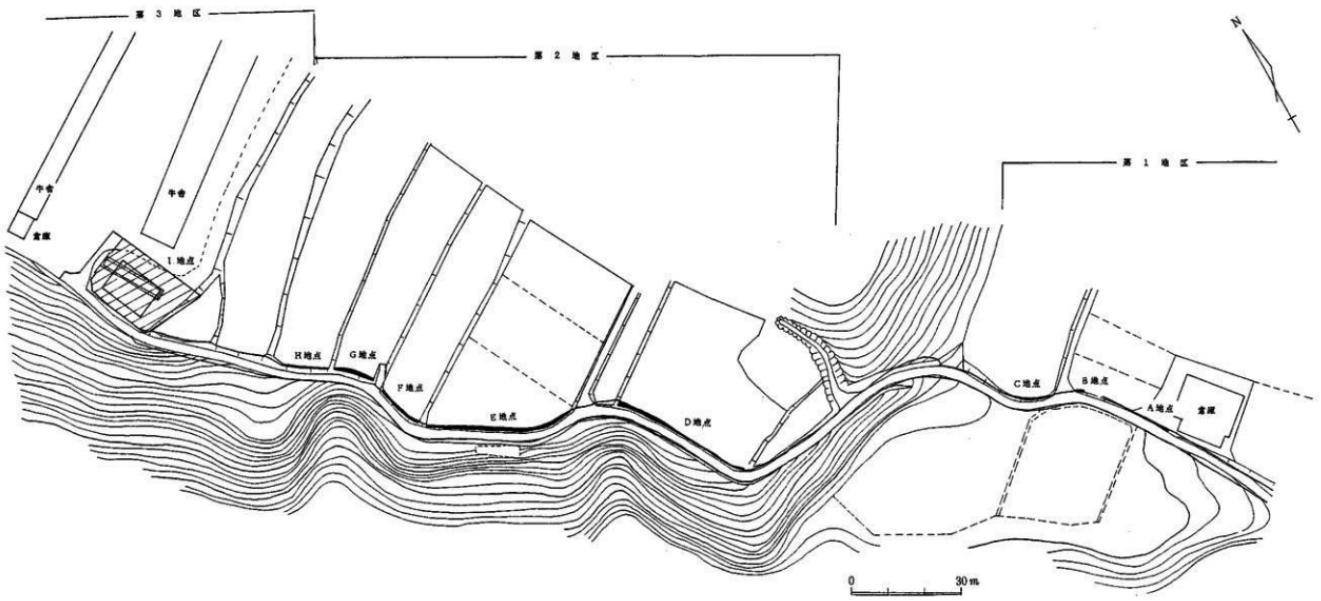
図版1 第1地区	27
図版2 第2地区	28
図版3 第3地区	29
図版4 出土遺物	30
図版5 出土遺物	31



遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
1001	西都原古墳群	大字三宅・第・裏 字丸・右松	古 墓 古 墳	
1002	清水西原古墳群	大字清水字三宅	古 墓 古 墓	
1003	上ノ原通跡	大字清水字上ノ原 寺山	散布地	古墳一平安
1004	寺山通跡	大字清水字寺山	散布地	古 墓
1005	清水通跡	大字清水字寺山・枕崎 字丸久	散布地	旁生一古墳
1006	下尾筋通跡	大字三宅字尾筋下 尾筋下	散布地	旁生一平安
1007	上尾筋通跡	大字三宅字尾筋上 尾筋上	散布地	旁生一古墳
1008	日向国分寺跡	大字三宅字国分	寺 路	奈良一平安
1009	国分通跡	大字三宅字国分 字右松字富田	散布地	绳文一江戸
1010	上宮通跡	大字三宅字上・上宮 字富田	散布地	弥生一平安
1011	上宮古墳	大字三宅字上・上宮	円 墳	古 墓
1012	上宮城跡	大字三宅字上・高西	城 路	中 世
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	城 路	東北・東土施山
1014	諏訪通跡	大字三宅字尾砂門 大字右松字駒田	散布地	绳文一古墳
1015	酒元通跡	大字三宅字酒元 山王御塚	散布地	旁生一江戸
1016	堂ヶ島通跡	大字三宅字堂ヶ島 大字右松字引田	散布地	弥生一平安
1017	寺崎通跡	大字三宅字寺崎 大字右松字引田	集落跡	弥生一江戸
1018	上妻通跡	大字右松字引田 大字妻字上妻	散布地	绳文一江戸
1019	経塚	大字妻字上妻	経 塚	平 安

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
1020	桂元通跡	大字三宅字馬頭町 大字三宅字平野町	散布地	弥生一江戸
1021	童子丸通跡	大字童子丸字原ノ内・上原 字原ノ馬頭	散布地	绳文一江 戸
1022	上園古墳1号	大字童子丸字上園	円 墳	古 墓
1023	上園古墳2号	大字童子丸字上園	円 墳	古 墓
1024	上園古墳3号	大字童子丸字上園	円 墳	古 墓
1025	石寅通跡	大字三宅字石寅平ノ下	散布地	绳文一江 戸
1026	原口通跡	大字三宅字原口二ノ原 字原口一	散布地	弥生一平安
1027	寺原通跡	大字三宅字寺原・寺頭	集落跡	弥生一平安
3001	松本塚古墳	大字三納字宮田36	前方後円	古 墓
3002	松本通跡	大字三納字原町	散布地	古 墓
3003	松本原通跡	大字三納字原町 大字三納字原町・原町百子	散布地	绳文一古墳
3004	長野原通跡	大字三納字長野原	散布地	绳文一古墳
3005	永野通跡	大字三納字永野	散布地	弥生一古墳
3006	鶴原通跡	大字三納字鶴原	散布地	绳文一江戸
3007	長谷場通跡	大字三納字長谷場	散布地	弥生一平安
3008	三納村古墳群	大字三納・平郡	古 墓	古 墓
3009	法連寺通跡	大字三納字法連寺	散布地	弥生一町
3010	平城通跡	大字三納字平城	散布地	弥生一江 戸
3011	三納城跡	大字三納字平城	城 路	一 村山

第1図 鴨目原遺跡位置図



第2図 鴨原遺跡発掘調査区域図

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

西都市の西部に位置する三納・三財・都於郡地区は、昭和45年度には綾川総合開発事業が実施され、また、県営圃場整備事業等も行われ、水田・畑地帯の整備が進み農業形態が整いつつある。しかし、市の中心部から離れていることもあって、生活・生産環境面で整備が遅れている。このようなことから、この三地域内が農村総合整備モデル事業に選定され、それに伴い様々な事業が実施されている。

その中で、長野・平郡地区営農飲雜用水施設整備事業が昭和60年度から平成2年度にかけて実施されることになり、発掘調査を来年度工事が実施される配水池設置場所及びその管理道路の拡幅部分について実施することになった。調査は、市耕地課の依頼を受けて西都市教育委員会が実施し、古墳研究所が担当した。

調査は、昭和63年10月7日に着手し、途中農作物の関係で3ヶ月程中断したが、平成元年2月27日に終了した。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

鴨目原遺跡は、西都市街地の西方約4km・九州山地が南に細長く延びた台地上に位置している。台地の南側眼下には三納平野が広がり、その三納平野の中央を三納川が蛇行しながら東流し、水田を潤している。この三納川は、中村地区の北西部で三財側と合流し、西都市の南西端に位置する現王島近くで一つ瀬川と合流する。

鴨目原台地の東側・谷を隔てた永野原台地上には通称「百塚原」と呼ばれている38基の古墳が点在し、西側の谷を隔てた長谷場台地上には弥生～平安時代の遺物が散布している長谷場遺跡が所在している。また、南東2・4



鴨目原遺跡第3地区近景

km程の水田には国指定の前方後円墳「松本塚古墳」が泰然とその姿を横たえている。

なお、この百塚原からは大正時代に金銅製の馬具類が発見され、現在国宝に指定されている。また、松本塚古墳については、県営圃場整備事業に伴う周囲の発掘調査を昭和 61 年度～62 年度にかけて実施し、多量の円筒埴輪をはじめ形象埴輪等の貴重な資料を得ている。

鶴目原台地は上・中・下の 3 段から成るが、かつて下段からは石斧等の石器類、中段からは土師器の壺や石棒、上段からは多くの石鏃やフレイクが出土した記録がある。

さらに、下段には寺号名等は詳らかでないが、中近世に寺院が建立され、その寺院が近世末期には中段に移築し、明治初期に廃寺にされたと里人の語り草が残されている。

第3節 調査の概要

鶴目原台地は、地形上南北 3 段にわかれているが、下段は標高約 40 m、中段は約 60 m、上段は約 75 m で、下段と上段では 35 m の標高差がある。その下段を第 1 地区、中段を第 2 地区、上段を第 3 地区とし、また調査するところを第 1 地区から順次 A～I 地点とした。

今回対象となったのは、第 3 地区の配水池を設置する地域と、第 1 地区・第 2 地区の管理道路を拡幅する部分（幅 2 m）である。なお、この第 3 地区は現在牧場になっており牛舎等が建てられているが、以前は桑畠であった。その桑畠を牧場にする際にかなり削平しており、黒色土がまったく確認できなかった。加えて、配水池を設置するところの中央部は、牛の堆肥を入れるために幅 3 m・深さ 1 m・長さ 18 m にわたって掘り込まれていた。道



第3図 第1地区 A～C 地点遺構分布図

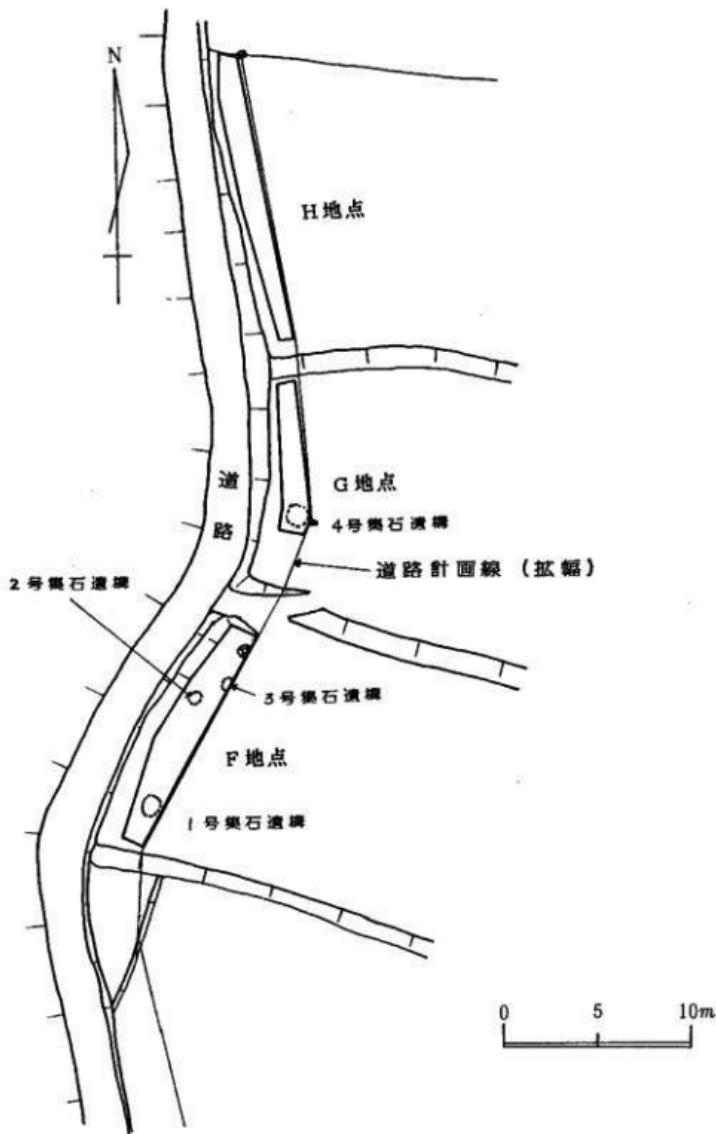
路を拡幅する部分については、樹木等によって調査不可能なところを除いて、すべて調査を行った。

調査の結果、第1地区より寺関係と思われる遺構が検出され、それに伴って陶磁器・瓦器等の遺物が出土した。

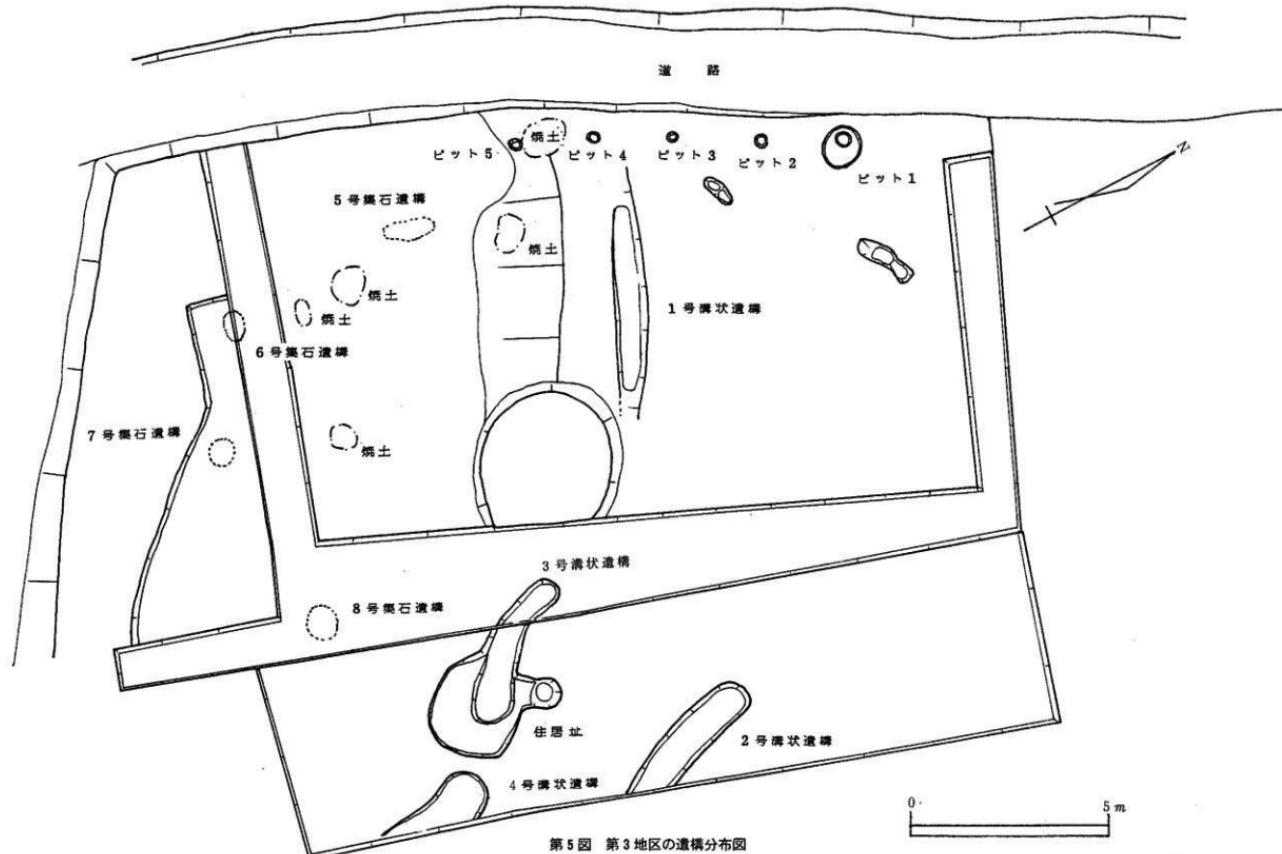
第2地区では、遺物は少なかったが、縄文時代の集石遺構が4基検出された。

第3地区では、縄文時代早期の住居址（1軒）をはじめ、溝状遺構が3ヶ所・集石遺構が4基・ピット（柱穴）が11個検出された。遺物は、縄文土器を中心に弥生土器・土師器等が出土した。

これらの詳細については後述するとして、縄文時代早期の住居址が検出されたこと、また、集石遺構の集石の下から焼土がたいせきして検出されたことは、県内でも珍しく、大きな成果である。



第4図 第2地区F～H地点遺構分布図



第5図 第3地区の遺構分布図

第2章 遺構と遺物

第1節 繩文時代の遺構と遺物

1. 遺構

縄文時代の遺構は、住居址が第3地区より1基、集石遺構が第2地区で4基・第3地区で4基の計8基、溝状遺構が3ヶ所検出された。また、このほかに第3地区では、せまい範囲ではあるものの焼土のみが6ヶ所検出された。これら遺構は、いずれも第2オレンジ層の2層上の黄褐色土より検出された。

住居址（第11図）

住居址は、第3地区1地点の東側より1基検出された。東西2.2m、南北2.2mの方形を呈した竪穴式住居であるが、東側を溝状遺構が切っている。また、北側には円形土坑が接しておらず、その底部から長さ57cm・幅27cm・厚さ13cmの弾丸状の長自然石が横に伏せた形で出土した。

地表面からの深さは約30cmで、

第5層の黄褐色土から検出された。
その黄褐色土を北側では20cm掘りこんでいるが、南側では黄褐色土が南に向かって傾斜しており3cm程しか掘り込んでいない。なお、ピット（柱穴）は確認できなかつた。



第3地区住居址検出状況

遺物は、縄文時代早期の貝殻条痕土器がほとんどで、その他弥生土器等がわずかに出土している。石器は、石鏃・剥片石器が出土しているのみである。

溝状遺構（第13図）

溝状遺構は、第3地区より4ヶ所検出されている。1号溝状遺構は、遺物等も出土せず判断がつきにくいが後世の遺構であると思われる。

2号溝状遺構は、東側中央部（住居址の北西5m）より検出された。現在確認しているだけで長さ3.5m・幅0.9m・深さ0.55m、先端が半円状をした、南北に延びた遺構である。その先端部の底には、長さ70cm・幅60cmにわたって焼土がたいせきしているが、現在のところなぜここに焼土がたいせきしているのか半断がつかない。また、断面はU字

状になっている。遺物は、上面に集中しており、ほとんど縄文時代早期の貝殻条痕文土器である。その他、石鎌やフレイク等が出土している。

3号溝状遺構は、住居址を切っている遺構で、長さ8m・幅0.9m・深さ0.65mの両端が半円状をした、東西に延びた遺構である。遺物は、2号溝状遺構と同様縄文時代早期の貝殻条痕文土器がほとんどで、やはり上面に集中している。

4号溝状遺構は、東側南部（住居址の南東2m）より検出されたが、そのほとんどが対象地外である。現在確認しているだけで長さ2.4m・幅1.1m・深さ0.35m、先端が半円状をした遺構である。遺物は、縄文土器とフレイクが出土している。

集石遺構（第8図・第12図）

集石遺構は、第2地区F地点で3基・G地点で1基・第3地区I地点で4基の計8基検出されたが、I地点の7号集石遺構は層位的に、また、出土状態からみて2次的なものであると思われる。

1号集石遺構は、第2地区F地点の南側から検出された鴨目原遺跡では最大の集石遺構である。東西1m・南北1.1mであるが、掘り込みは不安定で確認できなかった。遺物は出土していない。

2号集石遺構は、F地点中央部・1号集石遺構の北側6mより検出された。東西0.8m・南北0.85m・深さ0.18m、円形の掘り込みの中に拳大の焼石が円形状に集石している。遺物は出土していない。

3号集石遺構は、F地点北部・2号集石遺構の北東2mより検出されたが、その半分が対象外地である。南北0.8m・深さ0.15m、円形の掘り込みの中に焼石がわずかに散乱している。遺物は出土していない。

4号集石遺構は、第2地区G地点より検出された。掘り込みは確認できなかったが、東西0.7m・南北0.8mに拳大の焼石が集石している。

6号集石遺構は、第3地区I地点の南側より検出された。掘り込みは確認しにくいが、底部より焼土が東西0.9m・南北0.4mの範囲で5cm程たいせきして検出された。焼石は散乱しており数も少ない。遺物は縄文土器がわずかに出土した。

8号集石遺構は、I地点南側中央部より検出された。掘り込みの南側は不安定であるが、東西1.1m・南北1.1mの円形状で、底部には東西0.9m・南北0.9mの範囲で焼土が10cmもたいせきしている。また、この焼土の中央部からは炭化物が検出された。遺物は縄文土器が出土している。

焼 土 (第9図)

焼土は、第3地区I地点西側南部で6ヶ所検出されたが、最大のもので直径が1m・最小のもので直径が0.4m、5cm程たいせきして検出された。遺物は、いずれも伴わない。

2. 遺 物

縄文土器 (第14図)

縄文土器は、第1地区より数点出土しているのみで、ほとんどが第3地区より出土している。土器は、早期の貝殻条痕土器系の前平式土器が主体をなしている。その他に、ジグザグに連続刺突を施す土器(15)が1点出土している。

前平式土器は、口縁部に特徴をもっているが、その文様によって5つに分類できる。

A類 貝殻腹縁による刺突を口縁端部に連続に施す土器(3・4・8・10)

B類 2本の凹線を口縁部に平行に施す土器(1)

C類 ヘラ状の施工具で刺突を連続に施す土器(7・9)

D類 貝殻腹縁による連続刺突の下に2本の凹線を平行に施す土器(6)

E類 胎部と同様の貝殻条痕を口縁部にまで施す土器(2・11)

石 器 (第17図)

石器は、打製石斧・石鎌が出土している。打製石斧(60)は、住居址より出土したもので、頁岩製である。石鎌(61~66)は、すべて第3地区から出土したもので、打製石鎌と磨製石鎌に分かれる。打製石鎌は、形態的には三角形(63~66)と二等辺三角形(62)に分類できる。また、基部でみると平基(63・64・66)のものと、凹基(62・65)のものとがある。石材は黒曜石のものが多いが、チャート(66)も使用されている。磨製石鎌(61)は、弾丸形であるが下部が欠損している。石材は頁岩である。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺 構

弥生時代の遺構は検出されなかったが、第1地区及び第2地区より弥生土器の壺や甕片が出土しており、遺構の存在が推定される。

2. 遺 物

弥生土器 (第15図)

弥生土器は、第1地区及び第3地区より、量的には縄文土器よりはるかに少ないが出

土している。形態的には壺や甕が多い。

16は甕の底部で、木の葉痕がある。17・18は丸底の壺の底部であるが、17は丁寧なヘラ磨きが施されている。

第3節 古墳時代以降の遺構と遺物

1. 遺構（第4図・第6図・第12図）

古墳時代以降の遺構は、第1地区A地点より配石遺構が、C地点より溝状配石遺構及びピット（柱穴）5個が、また第3地区I地点よりピット（柱穴）及び円形土坑1基が検出された。

このA地点及びC地点の遺構は、調査区が幅2mと狭いため判断はつきにくいが層位的に、また出土遺物等から鶴目原にあったといわれている寺関係の遺構であると思われる。

I地点のピットは、西側から5個1列に並んで検出されているが、遺物が出土しておらず時代等は判断がつきにくい。円形土坑は、住居址の北側に接しており、直径70cm、深さ55cmを計る。

2. 遺物

遺物は、土師器・須恵器・布痕土器・陶器・青磁・白磁・染付・瓦器・瓦・土錐・丸輪型金属器が出土している。

土師器（第15図）

土師器は、量的には縄文土器のつぎに多いが、小さな破片が多く器形の判断が難しい。19は、口縁部が「く」字状に外反している鉢で、口縁部径23cmを計る。20・21・26?は壺で、21は口縁端部で外反し、また、器厚が口唇部にいくにしたがって薄くなっている。22~24は杯で、22は口縁部径13cm・底部径8cm・器高2.8cm、23は口縁径11.2cm・底部径6cm・器高2.4cm、24は底部径6cmを計る。25は、高杯の脚部?と思われる。

須恵器（第15図）

須恵器は、わずかであるが全区より出土している。27・28は蓋杯で、27は口縁径18.4cmを計る。29は、底部付近と思われるが、器形等は不明。30は、甕の底部付近の破片である。

布痕土器（第15図）

布痕土器は、第3地区から1点出土しているのみであるが、あまりにも小破片であるため器形等は不明である。

陶 器（第16図）

陶器は、全区から出土しているが、第1地区が最も多い。32は、甕の底部で、底部径21cmを計る。33は、擂鉢の底部で、備前焼である。34・35は、碗の底部で、いずれも口縁部が欠損している。36は、土瓶の注口である。37は、つまみのついた蓋で、上面の径8cmを計る。38は、小鉢の底部である。39・40は、壺の口縁部で、口縁端部は厚みをもち口唇部は平坦になっている。

青磁・白磁（第16図）

青磁・白磁とも小破片で、量的にも少なく、白磁ともなるとわずか2点である。41～43は、碗あるいは鉢の底部で、44は碗の胴部と思われる。

瓦 器（第17図）

瓦器は、わずかに4点出土したのみであるが、45は、第2地区D地点から出土した盤で、胴部に孔を1ヶ所穿ち、口縁部には小さな抉りを1ヶ所施している。口縁部径27cm・器高5.8cmを計る。器厚は、底部はわりと薄く、口縁部は厚い。46・47は、完形の碗で、口縁部はわずかに外反し口縁端部は丸くおさめられている。46は、口縁部径13.6cm・底部径4.5cm・器高4.2cm。47は、口縁部径13.8cm・底部径4.5cm・器高4.5cmを計る。48は、高台付の杯で口縁部径13.6cm・底部径10cm・器高5cmを計り、高台は短く5mm程度で、ひらいている。

瓦（第17図）

瓦は、第1地区C地点及び第2地区D地点よりわずかに出土している。49は第1地区C地点から出土した軒丸瓦である。

染 付（第17図）

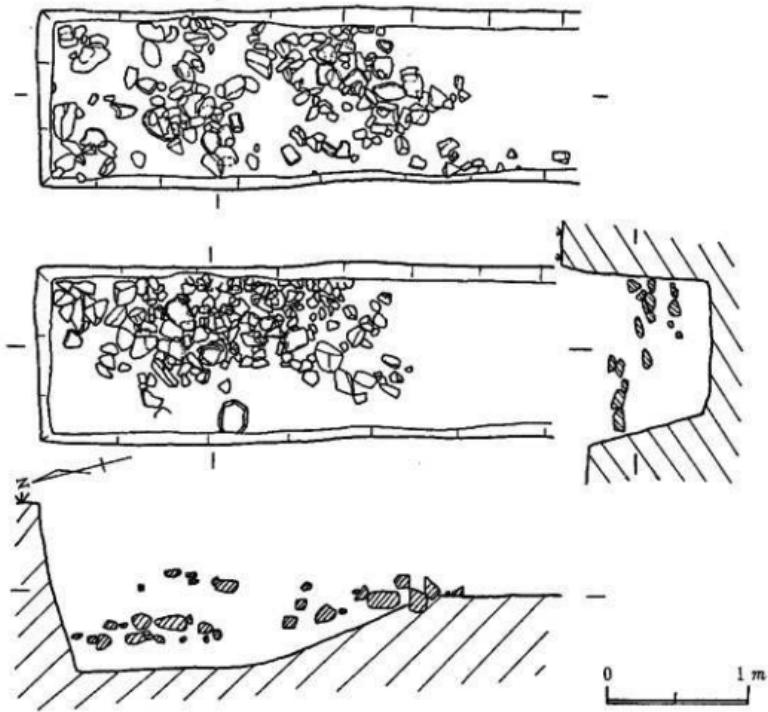
染付は、第1地区及び第2地区から出土している。器形は、碗（50・51・52・54・55・56）が多く、その他に小鉢（53）・小瓶（57）等がある。中でも54は、口縁端部で外反した、器厚の薄い赤絵で、1点しか存在しない。

土 錘（第17図）

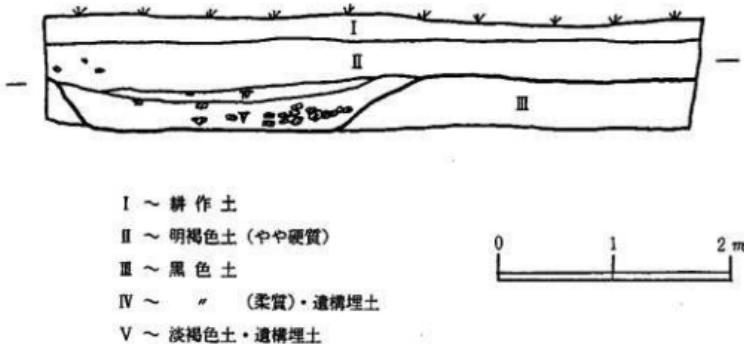
土錘は、わずかに1点で、第3地区の中央部より出土している。長さ4.5cm（現存）・直径1.7cm・内径0.5cmを計る。

丸輪型金属器（第17図）

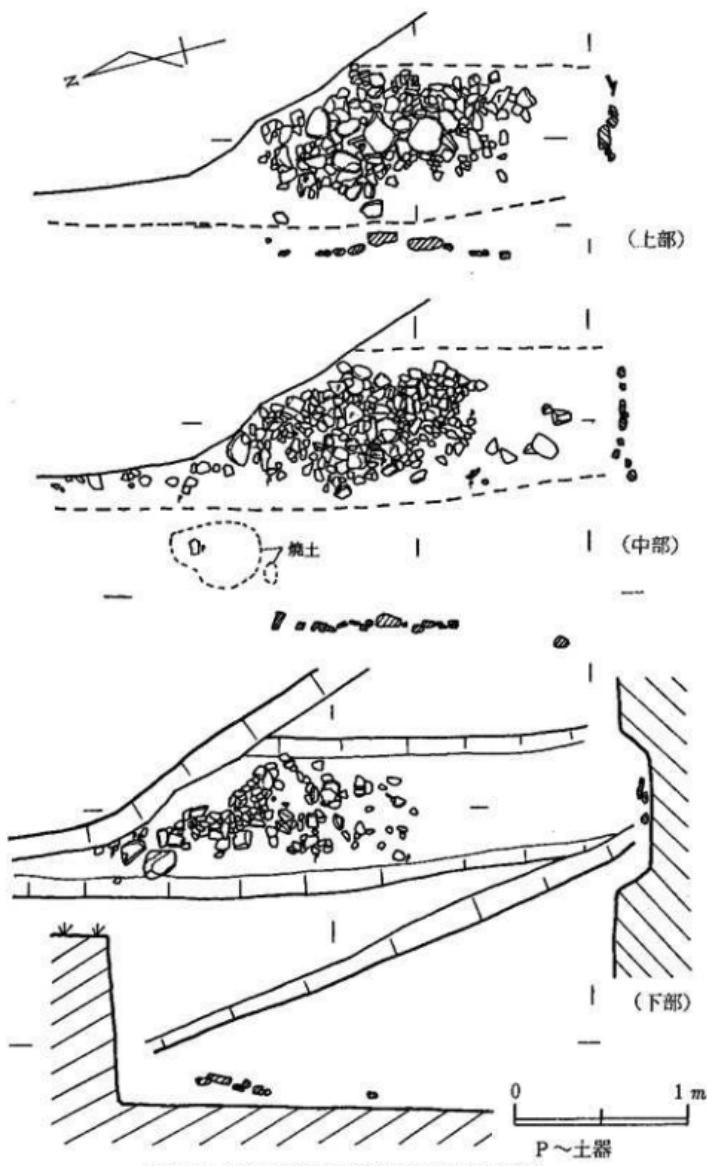
丸輪型金属器も1点で第1地区C地点より出土している。直径1.6cm、内径1.4cmを計る。



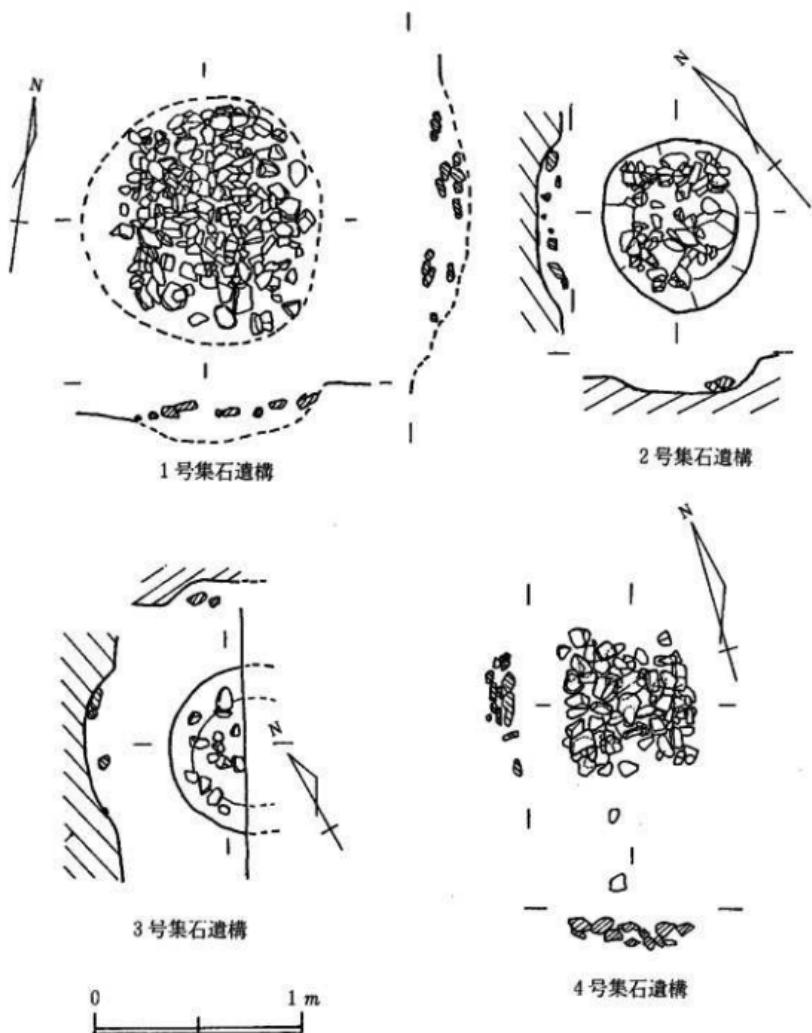
第6図 第1地区A地点配石遺構実測図



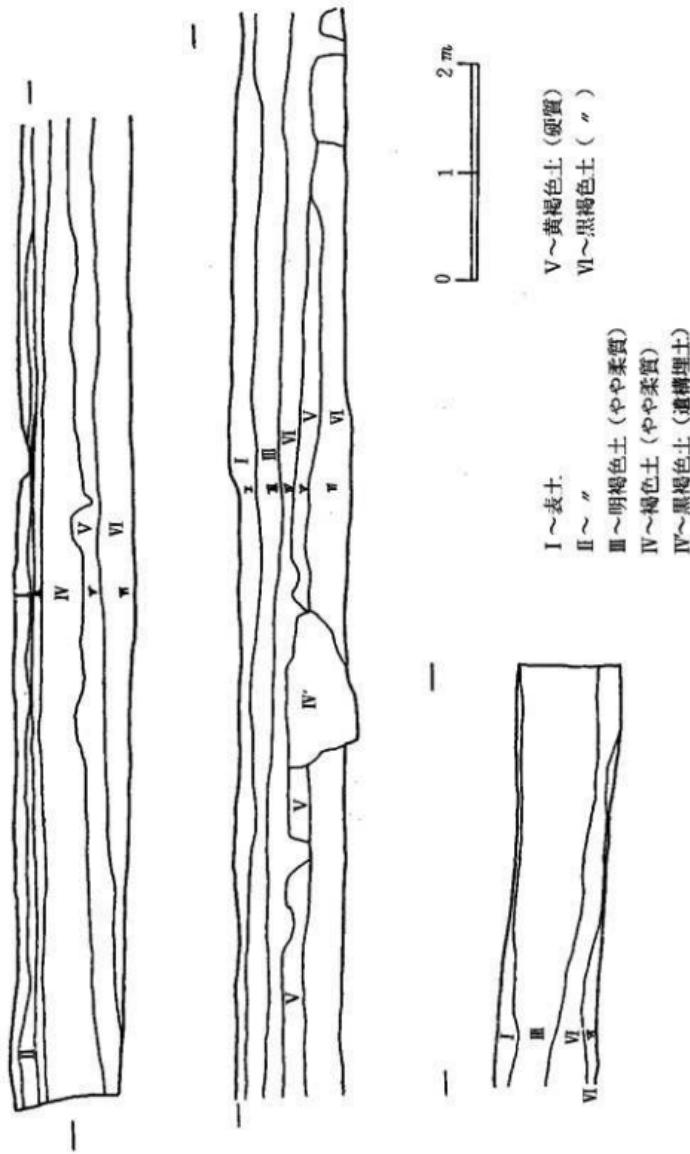
第7図 第1地区C地点東側壁面土層図



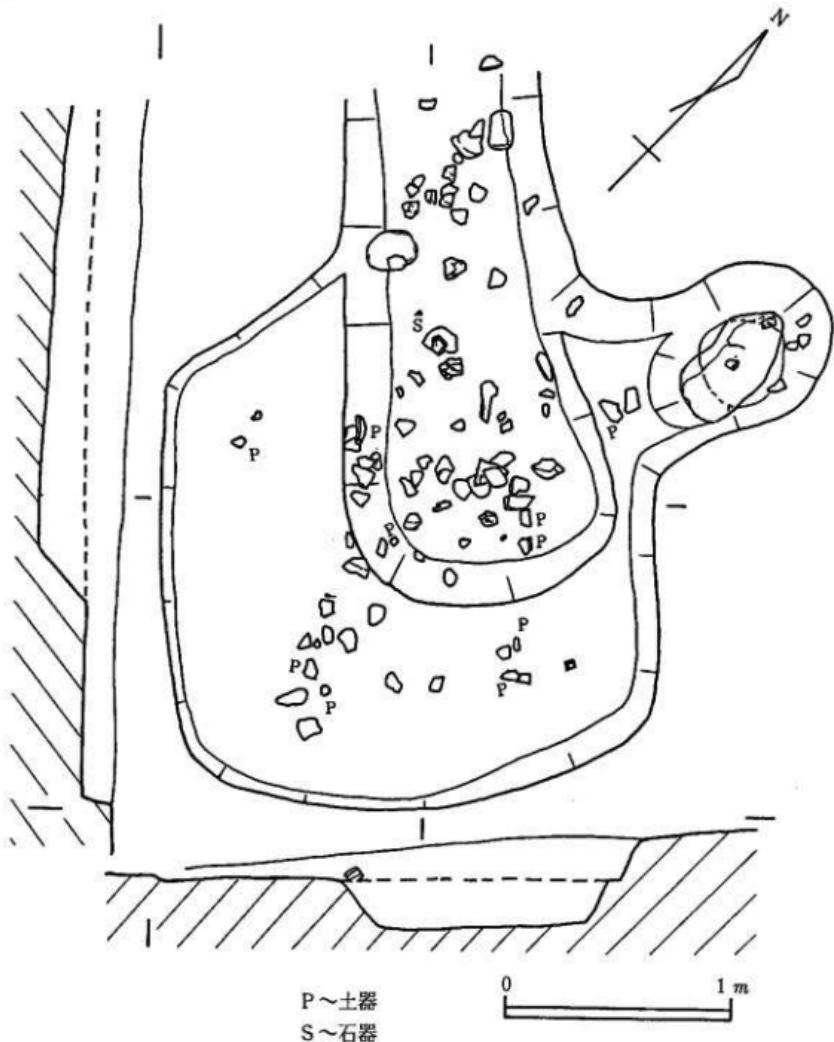
第8図 第1地区C地点溝状配石遺構実測図



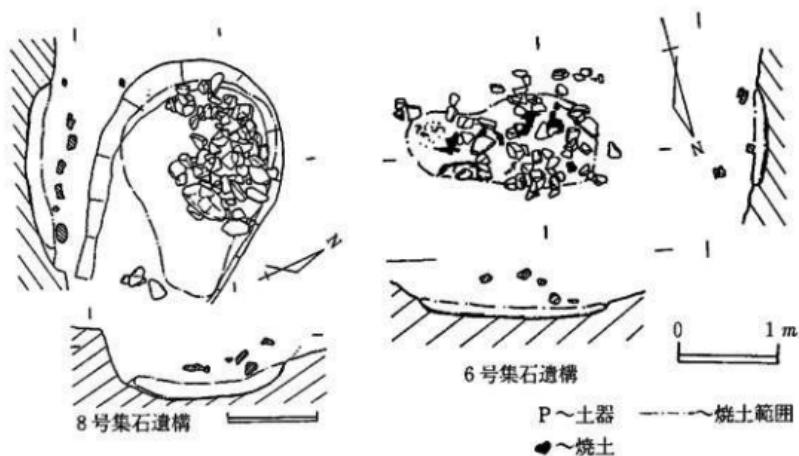
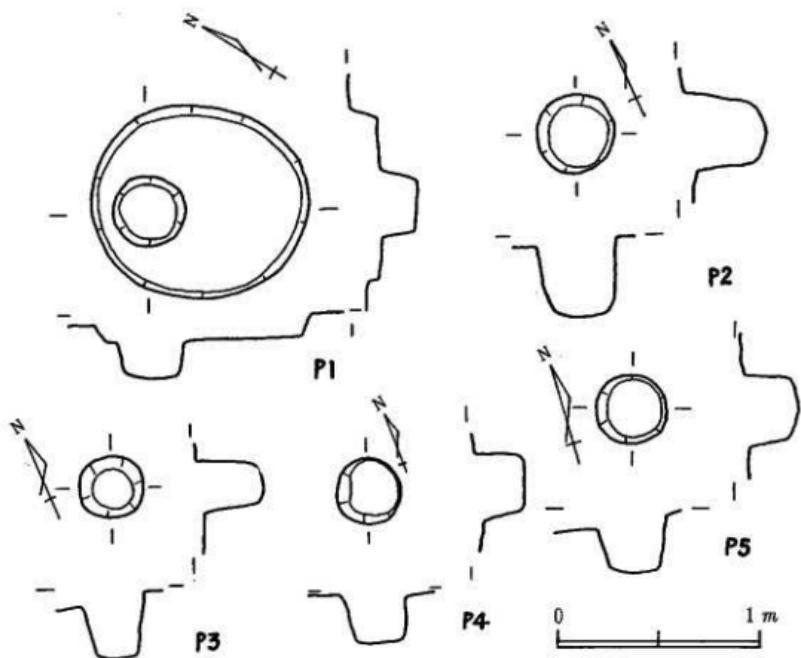
第9図 第2地区1号～4号集石遺構実測図



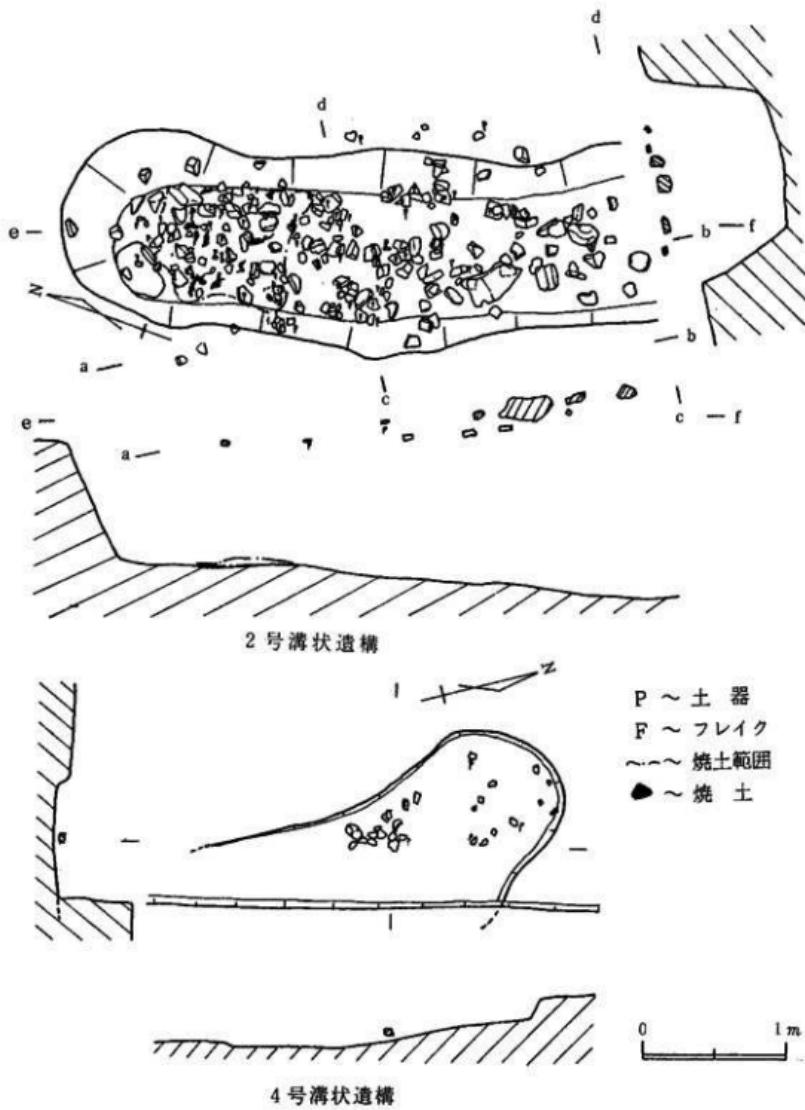
第10図 第3地区中央側土層図



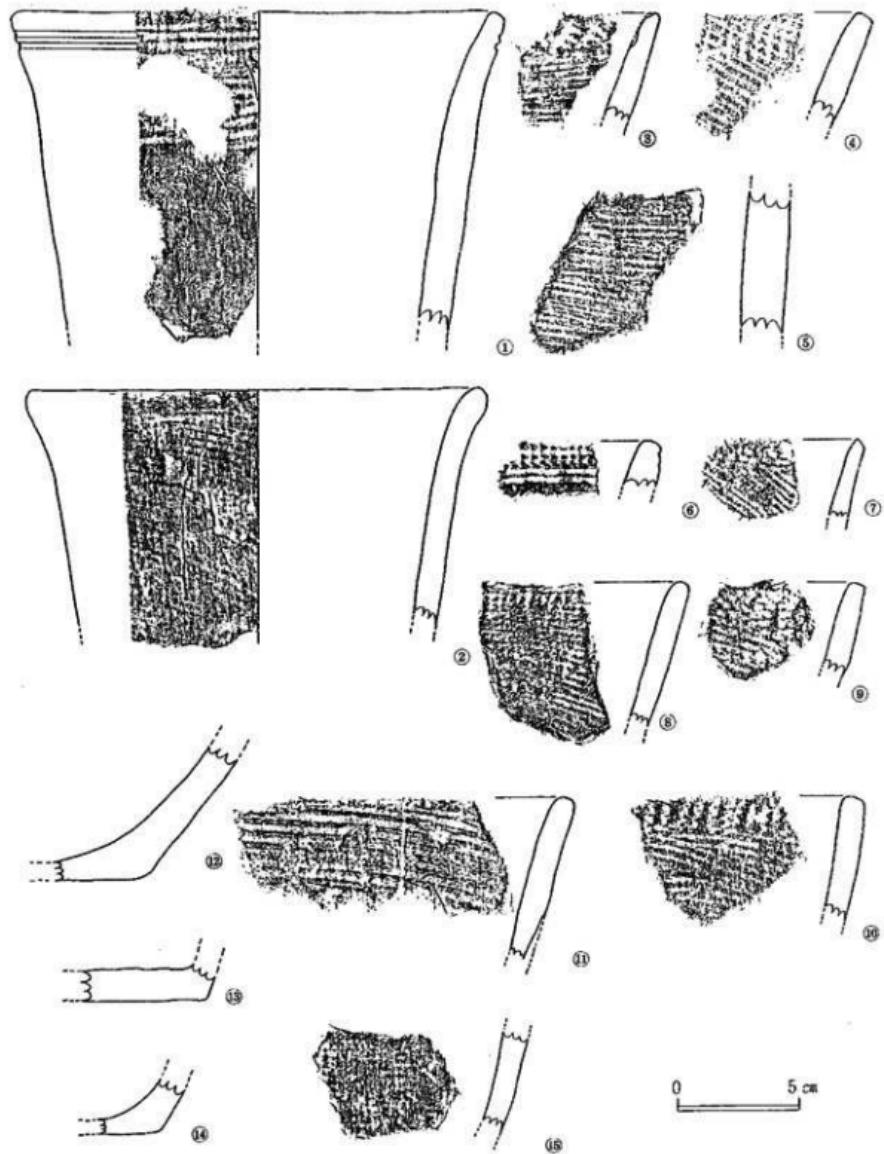
第11図 第3地区住居址実測図



第12図 第3地区ピット及び集石遺構実測図

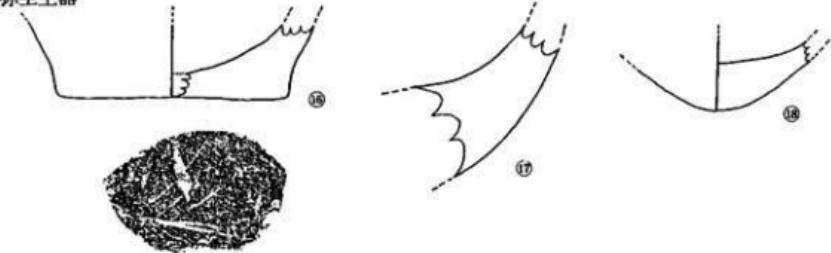


第13図 第3地区 2号・4号溝状造構実測図

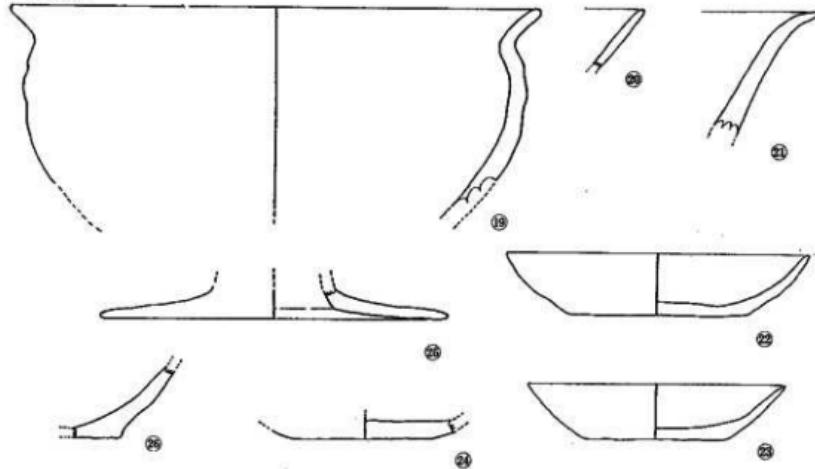


第14図 出土土器実測図・拓影（縄文土器）

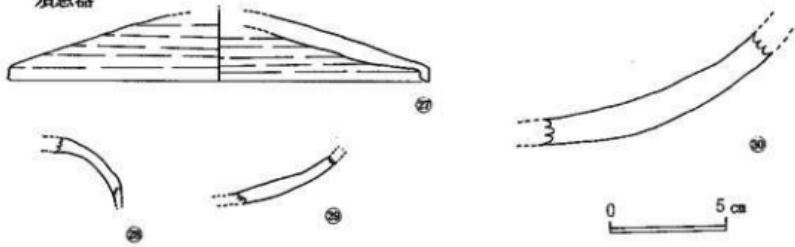
弥生土器



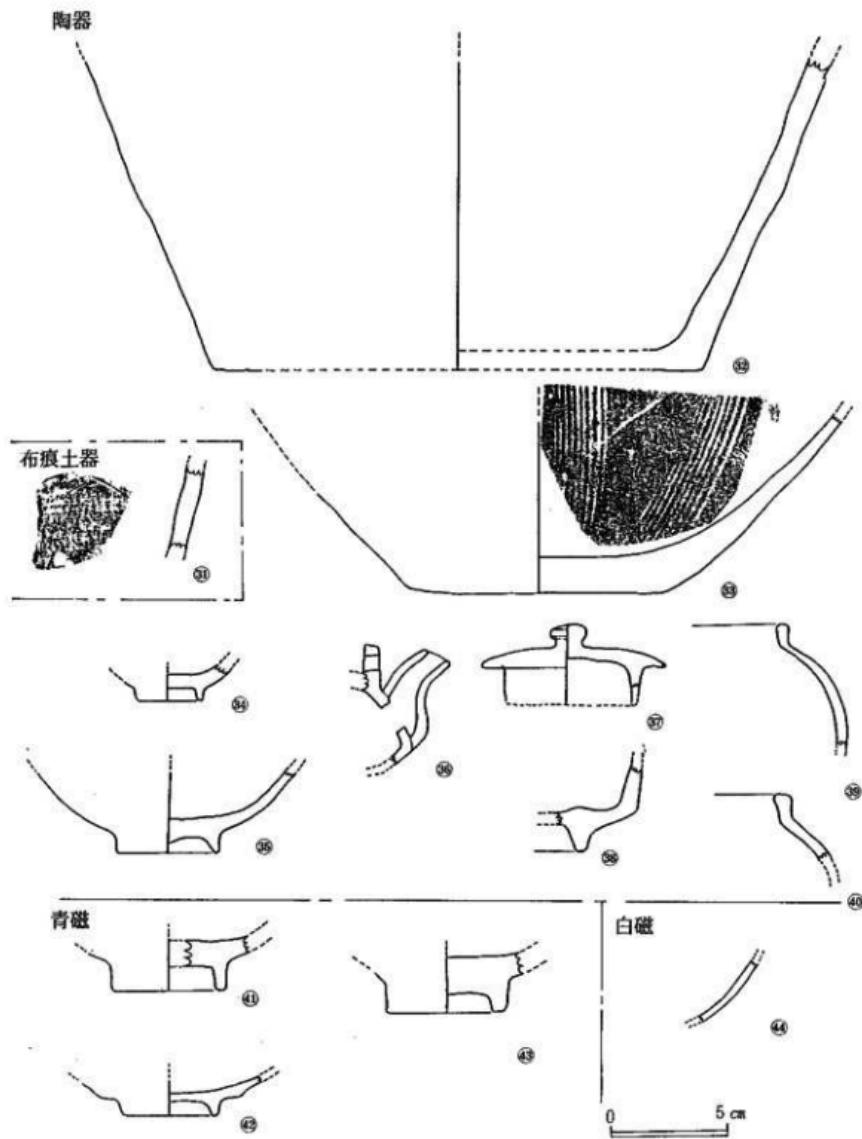
土師器



須恵器

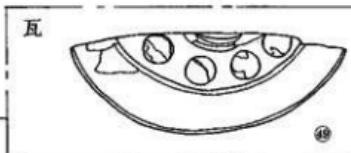
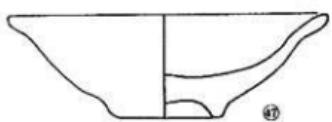
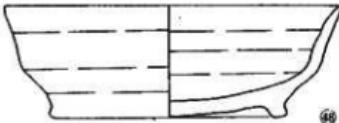
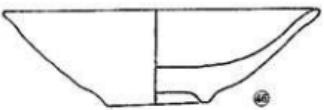
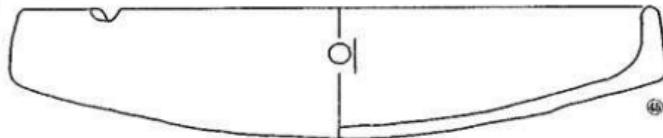


第15図 出土遺物実測図（弥生土器・土師器・須恵器）

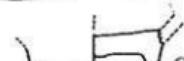
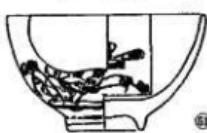


第16図 出土遺物実測図（布痕土器・陶器・青磁・白磁）

瓦器



染付



土錘

丸輪型
金属器

0 5 cm

第17図 出土遺物実測図（瓦器・瓦・染付・土錘・丸輪型金属器・石器）

第3章 まとめ

日高正晴

このたびの鶴目原遺跡の発掘調査に際しては、この丘陵の地形が下の方から第一段、第2段、第3段となっていたので、調査地区もその三段にそって下から第1地区、第2地区、第3地区と区分された。しかし、この調査の主眼になったのはこの丘陵台地上の第3地区の遺跡であるので、以下、その地区を中心述べてみたいと思う。まずこの第3地区からは、注目される遺構として、縄文早期の住居址が確認されそして、その住居址の内部から貝殻条痕文を有する前平式の縄文土器が発見されたことである。この住居址遺構の上部は削平されているので深さは比較的に浅くなっているが、表土が残存していたら、さらに深い竪穴住居址になっていたと思われる。それから興味深いのは、この住居址の北側に突出して円形土坑が存在するが、この土坑の部分は住居址の壁部分に連なっており、同一住居址の遺構のようにもみなされる。そしてその円形土坑の中に長さ57cm、幅(中央部)27cm、厚み、上部9cm、下部14cmの長自然石--種の立石--が横に置かれていた。この立石様自然石は上部が丸みをおびて細くなり、しかもその細くなった中央部に約2.5cmの割れ目が入れてあり、その割れ目の方の部分は欠損していた。この長自然石の下部が角張り上部が細く丸みをおび、その中ほどに割れ目を入れていることから想起されることは地母神信仰にまつわる呪術的生殖信仰に関連があるものではないかとも考えられるが、縄文早期の時期にしては縦年に余り遡りすぎると思われる。また、この第3地区からは集石遺構が4ヶ所発見され、縄文早期の時期に相応する遺構とみなすことができる。なお、縄文早期の遺構としては、昭和32年^註の西都原・原口遺跡の発掘調査において、貝殻条痕文のある前平式土器が発見され、そしてその層位から宮崎県では最初の集石遺構が1ヶ所確認されている。

註 日高正晴「原口遺跡」「西都の歴史」 西都市 昭和51年9月

数据 1. 地理

图 版

1 地图：政治版图

2 地图：政治版图（上幅）

3 地图：政治版图（下幅）

4 地图：政治版图（右幅）

題 開

図版 1 第 1 地区



A地点 配石遺構



C地点 溝状配石遺構（上部）

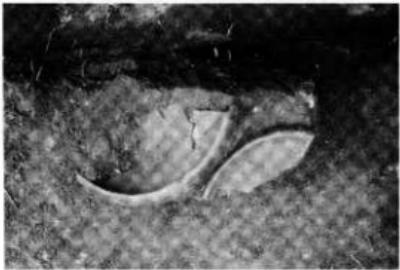


C地点 溝状配石遺構（下部）

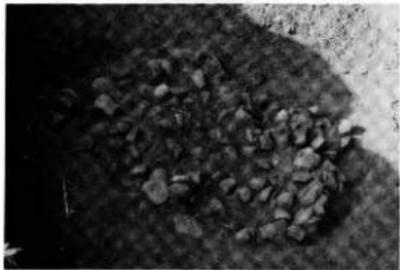


C地点 溝状配石遺構

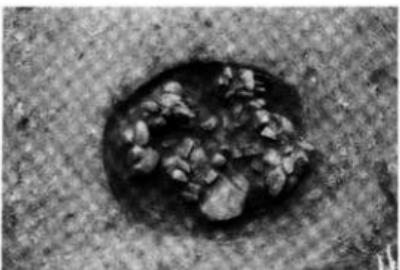
図版 2 第 2 地区



D地点 瓦器出土状況



F地点 1号集石遺構

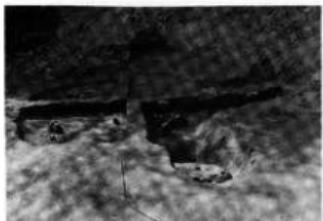


F地点 2号集石遺構

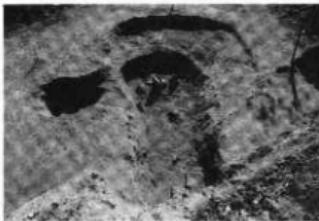


G地点 4号集石遺構

図版3 第3地区



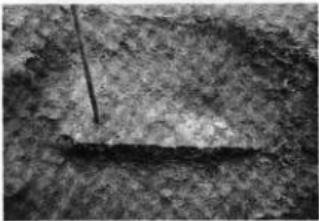
住居址調査状況



住居址・3号溝状遺構



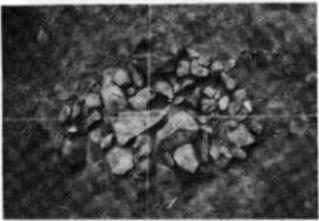
住居址北側円形土坑



焼土出土状況



7号集石遺構



8号集石遺構



2号溝状遺構



西側ピット列



住居址北側ピット出土長自然石

図版 4 出土遺物



縄文土器 1・2



縄文土器 3～15



弥生土器 16～18



土師器 19～26



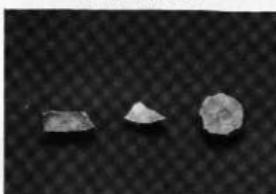
須恵器 27～30



布痕土器 31



陶器 32～40



青磁 41～43



白磁 44



瓦器 45

図版 5 出土遺物



瓦器 46・47



瓦器 48



瓦 49



染付 50・51



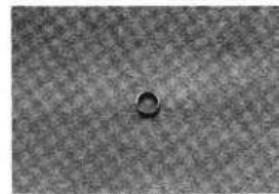
染付 52・53



染付 54~57



土錘 58



丸輪型金属器 59



石斧 60



石鐵 61~66

西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

発行年月日 平成元年3月31日

編 集 西都原古墳研究所

発 行 西都市教育委員会

印 刷 なかむら印刷所
